



「傾城恋飛脚」(けいせいこいびきやく)

神戸大学経済経営研究所

教授 山地秀俊

竹本住大夫と鶴沢清治の芸風対立を扱ったテレビドキュメンタリー番組の影響で舞台を見始めた俄か人形浄瑠璃ファンであるが、結構面白くなってハマっている。1月も初春公演に出かけた。人形の魅力、語りの魅力、三味線の魅力といろいろな要素がありそうだが、ストーリーも魅力の一つである。いささか紋切り型の対比でかつ言い尽くされているが、人形浄瑠璃のストーリーの魅力を、通常我々が当然と思っている西洋合理主義の考え方と対比しながら話を進める。

タイトルの「傾城恋飛脚」は、今年の初春公演の演目の一つであるが、飛脚屋の養子忠兵衛と傾城(遊女)梅川の逃避行を扱ったものである。今年は「新口村の段」が掛けられたが、忠兵衛が為替金の封を切るという大罪を犯して梅川とともに生まれ故郷の新口村に逃げ落ちてくるというシーンであり、その中でわれわれビギナーでも知って有名なシーンは忠兵衛の父親孫右衛門が梅川に、罪を犯した子を持つ親の心情を語る場面である。「養子に出した倅が商売で成功を収め、有能な子供を早々と養子に出してしまった親の不明を詰(なじ)られるほうが、養子に出した倅が大罪を犯して、不孝な倅を早々と養子に出して縁切りをした先見性を褒められるよりも、親にとってはどんなに嬉しいものか」と、梅川を養子に出した倅忠兵衛の嫁だと薄々悟った孫右衛門が、義理と情の板挟みとなった心情を吐露する。芝居でも、西洋合理主義を基礎とした芝居が明治期以降の日本に入る以前の歌舞伎や新派の芝居に、このような伝統的な義理・人情の純化された考え方が垣間見られる。

明治期に書かれた泉鏡花の小説で後に新派の代表作となる「婦系図」(おんなけいず)でも伝統的な思考が随所に見られる。有名なお蔦・主税の悲恋話であるが、主税は恩義ある真砂町の酒井先生の言いつけでお蔦と別れるのだが、湯島の白梅の下で二人によって交わされる「お蔦、黙っておれと別れてくれ」「別れる切れるは芸者のときに言う言葉」というセリフは、日本演劇史上でも上位に入る名セリフである。またお蔦が、自分と別れて静岡に赴任する主税に対して「静岡って箱根より遠いんでしょ」と語りかけ、遠くに去っていく好きな男性への心配と恋慕の情を表現する。ところが西洋合理主義の洗礼を受けた女性としての女優水谷八重子(初代)は、このセリフを言うのが嫌でたまらなかったという。八重子いわく「箱根と静岡のどちらが遠いかも分からないような女性は恋などするな」と。人形の家、マダムヴォーバリーで描かれる自我に目覚めた自立した女性とはあまりにかけ

離れている。

これら日本的と称される考え方に代表されるように、人形浄瑠璃や歌舞伎あるいは明治の伝統的芝居のストーリーには、夫婦、親子、家や店の上下、子弟、男女関係などに現代的な合理主義的の考え方では割り切れない、しかしそういう考え方もあろうと納得はできる考え方が随所に出てくるのである。忠義・恩義・情といった伝統的なある意味で感情を基礎とした考え方や行動は、現代の多くの人の支持を得られなくなっている。しかし完全に得られないのであれば、人形浄瑠璃や歌舞伎あるいは新派といった古典的芸能はとっくの昔に廃っているはずであるが、ある程度の支持を得て現代社会でも確固とした地位を固めている。

実は問題は、西欧では、こうした合理主義あるいは効率主義を神の摂理と位置付け、経済活動の背後に位置付けたことである。経済活動を禁欲的遂行することは神の摂理にかなうと考えた。合理的・禁欲的な行動を採ってこそ人間が高められるのである。それに比して感情的行動は神の摂理に合わないということになる。しかし日本的・伝統的な情緒的・感情的考え方がある程度の支持を得るということから、われわれにとっては、合理主義と情緒主義は、どちらを取るかではないようにも思われる。話は飛躍するが、脳実験の成果に、物的利得と名声、どちらを獲得して満足を得ても、脳の中では同じ個所が賦活しているという報告がある。あるいはある金額をある人間が別の人間に分けるというアルチメイタムゲームの実験では、ある金額を分ける側が例えば五分五分で分けると受け取る人間は喜んで受け取るが、例えば七三で分けるとなると分け前を拒否するプライド高き？人間が出てくる。これも合理主義的発想を覆す事例である。こうした最近の研究結果をみると、合理的行動と感情・情緒的行動は対極に位置づけるべき行動原理ではないように思われる。

意外に人間は合理主義と人形浄瑠璃的考え方を、さほど区別していないのではないかという考えすら浮かんでくる。すなわち、人間としては意外にどちらで満足を得てもいいのではないかと思えるのである。むしろ合理主義は感情的・本能的思考の極限であり、動物的とさえ言えるのではないかと考えている。神の摂理に近いのは合理主義ではなく、人形浄瑠璃の世界でも描かれる情緒主義ではないかと思える。

すると続いて、それではなぜ、現実の世界ではそうは言っても両者は区別されるのかという問題も出てくる。それは、人間の本生としては両者に区別の必要なくても、社会制度・社会関係が人間に双方を区別することを要求しているのだと考えるのが妥当かと思える。例えば企業経営者は、人間本生としては、経営に成功して貨幣所得を多く獲得しても、多くの慈善事業にお金を費やして多くの人に褒められても、意外に双方から来る満足度は変わらないのではないか。ところが企業経営者としては、後者の場合はたぶん失格のレッテルを貼られる。そこで後者ではなく前者の追求に懸命になる。

日本人は生真面目なために、二者択一のうちの両者を追い求めることを許さず、どちらか一つの選択を迫る。合理主義なら合理主義、感情なら感情ということであるが、逆に区別しないことが、合理主義が徹底される今日、生きていく一つの知恵かもしれない。西

洋人は合理主義思想の行き着く極致の一つとして社会主義思想を生み出したが昨今はそれが薄手の外套着であったかのように平気で脱ぎ棄てている。その思想を真似た東洋人のほうがむしろ情情的にこだわっている。何事もバランス感覚が大事なのだろうか。私にとって人形浄瑠璃の観賞は精神的バランスを取る良い手段なのかもしれない。